

ワークショップ①
「地域情報と公共図書館の可能性」
ファシリテーター：
県立長野図書館長 平賀研也

(1) 4人のグループを作り、自分の図書館で行った「地域に関する企画」を2つ選びグループ内で共有する。

(2) 共有したものの中から一つ選ぶ。

選ぶ際に、先ほどの笹本先生の基調講演の中にあつた「地域にとっての誇り」という視点から、行った企画がその地域の人にとって大切なものであり、有意義で意味があつたもの、さらにこの後膨らませていけるものを一つ選びだす。

(3) 選んだ企画を発表する。

その際、その企画が地域にとってどういふ点が誇りなのかも併せて説明をする。
(グループ A: 祭りのはんてん B: 地震(防災) C: 紙芝居 D: もののけ E: 戦争体験 F: いいところマップ)

(4) 選んだ企画のテーマについて「教育」という視点でアイデアを出し合う。

とかく図書館(博物館)では、資料を集めて展示して終わり、展示してある期間だけで終わりということが多い。またそれは図書館がやることかという指摘もされることもある。

笹本先生の話の中で「教育」という話があつた。一過性のテーマで何かを伝えるのではなくて、その地域がその誇りを共有する、伝えていくという教育の視点で、選んだテーマについて図書館は何が出来るか、このネタをどう膨らましたら「社会教育」というにたる、しかも図書館らしいものになるか。

選んだテーマを、継続的な、持続する、地域が共有していく教育というにたるプログラムにするには、何をしたらできるか話し合いを行う。

(5) 話し合ったアイデアを発表、まとめこれについて正解はないので、試行錯誤しながらやっていくこと。

笹本先生から「地域の文化ってなんなんだ、地域を語れない図書館ってなんなんだ、伝わっていく教育活動でなくてどうする」という問題提起があつた。それを受けて、今我々がやっていることをもうちょっとエンパワーすることができないかということで議論していただいた。

当県では「信州デジくら」という名でオープン化したアーカイブがあり、世界中の人が見られる状態になっている。当館において、戦後70年の発禁の企画展示をした際、展示しただけでなくデジタル化し、さらにその場で講演会(ワークショップ)をしたりして、展示したものをリスト化し、国立国会図書館のデジタルコレクションとリンクさせ、当館の資料と他の資料をつないで広げていくことをした。一つの展示場とせず、資料としていかに伝えていくかが大事。

地域資料等を使っていく中でも、「情報の循環」「他のものをつなげていく」などのいろいろな膨らませ方があり、そこから「持続する学びの場」「共有できる地域の誇り」などが出てくるのではないか。



ワークショップの様子